

～戴帽式を終えて～ 第 86 回生 森脇 渚

京都第一赤十字看護専門学校に入学してから、たくさんの事を学んできました。毎日の座学では看護師になる上での基礎的な知識を学び、また演習では、どのように工夫すれば対象への安全・安楽な看護が行えるかを考えました。2 度の実習では、実際に臨床で働く看護師の姿を間近で見て、患者に寄り添うだけでなく、多くの情報を把握し、的確に援助を行う姿に強い憧れを抱きました。この 8 ヶ月間で、私は看護師になるという意思をはっきりと持つことができました。そして戴帽式にてナースキャップを戴き、看護師を目指す者としての自覚と責任を改めて感じました。沢山の方にお祝いのお言葉を頂き、その中で私が一番心に残ったのは、支部長の話された“医師”と“看護師”の違いです。医師は「神」とよく表現されるが、看護師は「天使」と表現され、その違いは、看護師は患者にとって癒しであり、心のよりどころあるということ。だから看護師は、患者の癒しの存在であり続けるべきなのだと学びました。看護師としての知識を身に付け、的確に援助を行えることはもちろん、患者さんの身体的・精神的苦痛を少しでも和らげたり、元気を与えられるようになりたいと考えています。今回の戴帽式を通して強く感じたことは、理想の看護師像を見失わず、夢やなりたい自分に向かって、今後の学校生活を頑張っていきたいこと、そして何より第 86 回生の皆が大好きだということです。私が今、学校生活を頑張れているのは、クラスの仲間たちがいるからです。一人では乗り越えられないことが、今でも、そしてこれからも沢山あると思います。同じ夢を持った仲間と一緒に全員で国家試験合格を目指して、頑張っていきたいです。